

前期

文系

二〇二〇年度入学試験学力検査問題

国 語
人文社会学部、法学部、経済経営学部 経済経営学科 一般区分、
都市環境学部 都市政策科学科 文系区分

一二〇分

答案用紙 三枚

注意

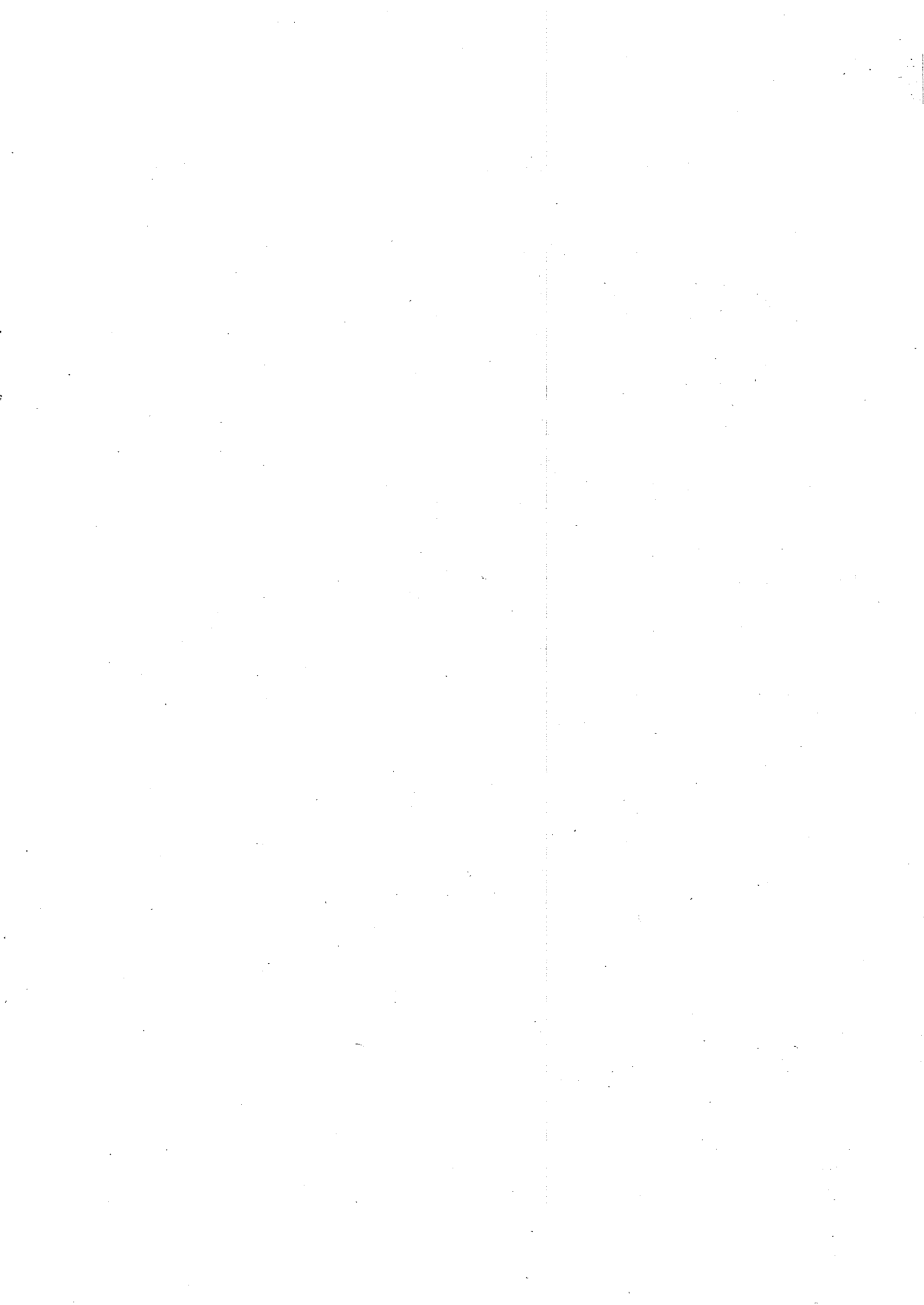
- 一、監督員の合図があるまで、問題の内容を見てはいけません。
- 二、受験番号及び氏名は、答案用紙の所定欄に必ず記入してください。

(例)
受験番号
1234567X
の場合

↓

	1	2	3
4	5	6	7 X

- 三、解答には黒鉛筆またはシャープペンシルを使用し、必ず配付された答案用紙に記入してください。答案用紙には、解答に関係のないことを記入してはいけません。
- 四、試験中に不鮮明な印刷等に気付いた時は、手をあげて監督員に申し出てください。
- 五、答案用紙を切り取ったり、持ち帰ったりしてはいけません。
- 六、問題冊子の余白は利用可能ですが、どのページも切り離してはいけません。
- 七、問題冊子は、持ち帰ってください。また、試験終了時刻まで退室できません。





一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

永観律師えいくわんりつしといふ人ありけり。年ごろ念仏ねんぶつの志深こころまじく、名利みやうりを思はず、世捨よせすててたるが如くなりけれど、さすがにあはれにも仕つかうまつり、^(ア)知れる人を忘れざりければ、ことさら、深山ふかやまを求むることもなかりけり。東山とうざん禪林寺ぜんりんじといふ所に籠居ろうきよしつつ、人に物を貸してなむ、日を送るはかりことにしける。借る時も、返す時も、ただ来たる人の心にまかせて沙汰さたしければ、^(イ)なかなか仏の物をとて、いささかも不法ふぼうのことはせざりけり。いたく貧しき者の返さぬをば、前に呼びよせて、もののほどに随ひて念仏を申させてぞ、^(ウ)あがはせける。

東大寺別当べつたうのあきたりけるに、白河院しらかはのいんこの人をなし給ふ。聞く人耳を驚かして、^(B)「よも受け取らじ」といふほどに、思はずにいなび申すことなかりけり。

その時、年ごろの弟子、つかはれし人など、我も我もとあらしめて、東大寺の庄園しやうえんを望みにけれども、一所いっしょも人のかへりみにもせずして、みな寺の修理しゆりの用途ようどによせられたりけり。みづから本寺に行き向ふ時には、異様いさむらなる馬に乗つて、かしこにあるべきほどの時料じれう、小法師せうぼうしに持たせてぞ入りける。

かくしつつ三年のうちに修理こと終りて、^(C)すなはち辞し申す。君きみ、また、とかくの仰せもなく、^(エ)こと人をなされにけり。^(D)よくよく人の心を合はせたるしわざのやうなりければ、時の人は、「寺の破やぶれたることを、この人ならでは心やすく沙汰すべき人もなしとおぼしめして、^(ウ)仰せ付けけるを、律師も心得給ひたりけるなんめり」とぞいひける。深く罪を恐れける故に、年ごろ寺のこと行なひけれど、寺物じぶつをつゆばかりも自用じようようのことなくてやみにけり。

(鴨長明『発心集』より)

※注

永観律師 一〇三三〜一一一一年。源国経の子。禪林寺中興の祖。 禪林寺 京都市左京区にある浄土宗の寺。

白河院 一〇五三〜一二二九年。第七二代天皇。当時、院政をしいていた。

問一 傍線部(ア)～(エ)を、現代日本語に訳しなさい。

問二 傍線部①～④の主語にあたる人物を、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。同じ記号を何度用いてもよい。

あ 永観律師

い 来たる人

う 貧しき者

え 白河院

お 小法師

か 時の人

問三 傍線部Aについて、「深山を求むることもなかりけり」とは、どういう意味か、説明しなさい。

問四 傍線部Bについて、「よも受け取らじ」と言ったのは、どうしてか、説明しなさい。

問五 傍線部Cについて、「すなはち辞し申す」とは、誰がどういう理由でどうしたのか、説明しなさい。

問六 傍線部D「よくよく人の心を合はせたるしわざのやうなりければ」とは、具体的にどういうことか、八〇字以内で説明しなさい(句読点も字数に含める)。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

生きものがその環境との齟齬そごに直面したとき、それが取りうる方向は二つある。一つには、生物としての自らの形態そのものを変化させることである。これは生物的適応と呼ばれる。生物的適応においては、刺激を受けて反応を返す生物の反応パターンが自然淘汰とうたうされて、適したパターンを実現する生物形態のみが生き残る。これは自然の思考といふべきものである。生物と自然環境との試行錯誤の歴史、すなわち自然それ自体の思考の過程が、すべての生物の形態のうちに凝結している。その結果、生き残った生物種は外部に適応する技術を備えるに至るが、生物の個体があるさまを意識化し、反省することはない。自然の思考が延々と営まれるうちに、動物は、刺激と反応の折り返し点において、その反射を司る神経組織を肥大化させるに至った。脳は、刺激に対して反応のパターンを選択する電話交換機のようなものである。大脳は、外界からの刺激に対するさまざまな反応パターンを、その環境の変化に即応してある程度選択できるように進化した。その進化の極点にあるのが高等動物であり人類である。

人間は、環境から物質的素材を調達してそれを組み合わせ、道具を形成する。それと同時に、人間どうしの関係性を変化させ、社会を形成する。多くの生物が自らの身体そのものを適応の道具とするのに対して、人間は、道具と社会を巧みに変化させ、生体と自然環境のへあいだに人工的環境を構成し、それによって外界に適応する。技術とは、生物的適応よりはるかに自由度の高いこの領域において適応を図る能動的行為を意味する。^A自然の思考に対して、これを人間の思考と呼ぶことができるだろう。

人間の思考は、特定の刺激に対して適切な反応パターンを即座に選択し、しかもその選択パターンを組み合わせ、その結果をシミュレートし、そのパターンを無限に複雑化する。知性と概念もまた、この適応のツールとして成立したのである。

このように考えるならば、二〇世紀のフランスの哲学者、アンリ・ベルクソンが『創造的進化』においてそう語るとおり、人間は「ホモ・サピエンス（知恵ある人）」である以前に、「ホモ・ファール（工作する人）」であることになる。人間とは生存する

ために道具と人間関係を考案し続けることを自然によって宿命づけられた存在なのである。

概念とは、生命がその適応のために世界を静止した姿で切り取る一つのツールであり、したがってその道具によって生きて流動する本体、つまり世界や生命それ自身を完全にハアクする^(ア)ことはできないとベルクソンはいう。だとすれば、人間という生命体がその適応のために創り出した技術によって、人間存在を完全に規定したり、人間社会を最終的に包摂することもできないはずである。あえてそれをなそうとすれば、それは手段がそれ自体目的化し、道具が本体を規定し、被造物が創造主に成り代わる倒錯を呼び出すことになる。

近代とはまさにこの倒錯を本気で成し遂げようとした時代であったといえる。適応の道具として生まれたにすぎない科学が、その原因であり、その土台である自然や宇宙、ひいては人間存在を解明し尽くすことを目指した。それと同時に、生物の適応の結果として生まれた工業技術が、その生物としての条件から人間を解放し、生きものとしての人間をそれとは違った何かに作り替えたいと願った。両者はともに、自然をその静止した姿のうちにとらえ、生きた躍動を機械的な反復のうちに凍結しようとしたのだといえよう。

人間の神経組織における情報伝達の速度は、その末端に位置する手と素材の運動速度よりもはるかに速い。刺激に対する反応パターンを自由に組織する大脳^(イ)エン系の機能は、制作における物との試行錯誤に先立って、その反応パターンを思考の水準でシミュレートし、精緻に仕上げることを可能とする。これが計画、もしくは設計の能力である。この設計の起源は文明の歩みとともに古いが、その手法を線遠近法^(ウ)によって方法的に規定し、それにデザイナー^(エ)の名を与えたのは一六世紀のフィレンツェであった。近代デザインは、その設計の思想を工業技術に適應することによって生まれるとされる。だとすれば近代デザインは、かの工業化の倒錯^(オ)とともに誕生したということになる。

だが他方で、そのような技術のあり方が人間にとって真に適切かどうかについての反省も生じた。工業化の圧倒的な進展に直面して、一九世紀のイギリスにおいてジョン・ラスキンやウィリアム・モリスは、工業技術の手に、その技術を生み出した生の血肉の次元があることを見出し、工業技術がかえってこの生の次元を圧迫していることを批判した。人間の脳は、技術

①を洗練させる過程において、既存の技術が「真に技術的か」を問い返す自己反省の能力を備えるに至った。それはたんなる適應のための実用的技術であることを超えて、その実用性は何のためにあるのか、人間にとつての真の富とは何かを批評的（クリティカル）に考えるようになる。

技術とはさしあたり、自己保存を目的とする手段の連関という意味での実用的な技術、つまり「目的に拘束された技術」である。しかし技術の源流は、超越者へと接近しそれと交流する技法、すなわち宗教的儀礼のうちにもたどることができる。たしかに祠や神殿の建設は、超越する自然の威力を囲い込み、それを制御可能にする自己保存の第一歩であった。しかし同時に宗教的儀礼は、当の保存すべき自己の存在理由を根底から問いただし、人間存在の根拠を探ろうとする試みでもあった。この後者の手続きは、自己保存という目的に拘束されることのない、「目的から解放された技術」の次元を構成する。その技術は、まさに自らが何を目指しているのかを知ることなき熱情によつて駆動されるのであり、そのかぎり、生存を意図する自己自身に反省を強要し、自己の根拠を掘りくずす技術であるといえる。超越者との緊張した関係のうちで営まれるこの技術の実践をプラトンは美の探求と呼ぶ。プラトンによれば善美の探求はたんに感覚器官の満足、つまり調和やキンセイの実現を意味するだけでなく、むしろ既存の調和を乗り越え、それを破壊し、自己の生存を危機にさらすことによつてのみ追求されるスリリングなものである。

生とは自己保存をあえて危機にさらすこの契機を抜きにして考えることはできない。自己保存の技術、工業技術が人間性を圧迫するのは、それが公害や搾取によつて人間の安全をオビヤかすだけではなく、むしろかえつて人間から不確定な要因を取り除き、人間を安全化するからである。そうした技術がいかに洗練され、感性に心地よいものになったところで、そこにギリシヤ的な意味での美は存在しない。

近代技術は、実用的な工業技術とサロンの純粹芸術へと分化してしまつた。デザインが技術のこの分裂に対抗し、その両者に総合をもたらすと主張するとき、デザインに課された美の要請は、自己保存を目的とする工業技術のあり方をあえて根本から危うくするクリティークの作業を要求するだろう。より安全で安心な自己保存のためにコンセプトを立て、設計図案を描

き、それを実現して、ユーザーのアンケートによってその効果を「実証する」という手続きがたいの場合退屈なのは、それが何物も刷新^③せず、何の意外性ももたらさないからである。前提をあえて揺るがし、より強力な生を蘇^{よみがえ}らせる哲学的要素を持たないからである。

※注

(古賀徹著「序にかえて」／古賀徹編『デザインに哲学は必要か』より。一部改変。)

線遠近法 Ⅱ 空間や立体を一つの平面の上に写しとるための技法。

ディゼーニョ Ⅱ (イタリア語) disegno. 素描、デ

ザイン。 フィレンツェ Ⅱ イタリア中部の都市。

ジョン・ラスキン Ⅱ (一八一九～一九〇〇) イギリスの美術批評

家。 ウィリアム・モリスとともに、中世手工芸の復興をめざしたアーツ・アンド・クラフツ運動の中心人物。

ウィリ

アム・モリス Ⅱ (一八三四～一八九六) イギリスの詩人、美術工芸家。

クリティーク Ⅱ (英語) critique. 批評、批判。

問一 傍線部(ア)～(オ)のカタカナの部分を漢字で記しなさい。

問二 傍線部①～③の語句の意味を説明しなさい。

問三 傍線部A「自然の思考」に対して、これを人間の思考と呼ぶことができる「について」、「自然の思考」と「人間の思考」の違いを、問題文に即して説明しなさい。

問四 傍線部B「工業化の倒錯」とはどういうことか、問題文に即して説明しなさい。

問五 傍線部C「目的に拘束された技術」と、傍線部D「目的から解放された技術」の違いを、問題文に即して説明しなさい。

問六 傍線部E「デザインに課された美の要請」とはどういうことか、問題文に即して一〇〇字以内で説明しなさい(句読点も字数に含める)。

次の文章を読んで、考えるところを四〇〇字以内で述べなさい。解答は縦書きとする。

情報ネットワーク社会が本格化したとき、人間はどのようなようになり、人間同士の間にもどのような問題が生じるであろうか。システム化された情報処理技術が高度に発達した段階の情報ネットワーク社会に特徴的なことは、情報的に個々人が他者や世界に対してかつてなく開かれることである。個々人一人ひとりにとっての選択の自由がきわめて大きくなることである。

だが、可能性としてはそうであっても、実際にみんながその可能性を享受できるとはかぎらない。それどころか、あらゆるシステムは一種の制度として惰性化し、人間あるいは個人を拘束してくるおそれがある。したがってここで必要なことは、氾濫する情報に流されず、惑わされないような自己、自己決定できるような自己を確立することであろう。

しかも、このような自己は、情報のシステムあるいはネットワークを離れてあるのではない。むしろその結節点として、地球という生態系のうちに育まれ、そのベースの上に成り立っている。ここに、情報ネットワークのなかにあって抽象的な存在になりがちな一人ひとりの人間の、大自然への着地がある。だからこそ、情報ネットワーク社会では、エコロジーがいつそう必要になるのである。

情報ネットワークは、その使われ方一つで、個々人の可能性を開くのではなく、かえって統一された或る意思決定や共通の感情を押しつけかねない。電子情報システムが巨大な（権力）と化したり、新たな格差が形成されたりするおそれもある。そのために、個々人が顔のないシステムのなかに埋没してしまうということにもなる。デマゴーグや独裁者がそれを利用するおそれもある。いや、なにも彼らが押しつけなくとも、横並びに同じ意見や感情を相互に強制することもありうる。

だから裏側からいえば、高度の情報社会では、個々人の立場は十分に尊重されなければならないし、個々人自身にしても、他人や周囲の者たちと、断じて安易に同化しないようにする必要がある。情報ネットワーク社会のなかでの新しい市民たる（ネチズン）（M・ハウベン）の命色）たちの手になる民主主義、（電子民主主義）の確立が要請されてきている所以である。

社会の電子的な情報ネットワーク化は、市民生活の基本的な諸原理を点検することを通して、鈍磨した道徳感覚を問い直す

絶好の機会なので、それを新しいコモンセンス形成の機会にしない法はないと思うのだ。その方向において情報ネットワーク社会でのエチケット(ネチケット)がV・シヤー(『ネチケット』一九九四年)によって提唱されている。それは、とりわけオンラインでの守るべき基本的諸ルール(サイバースペースの自覚、見えない相手への敬意、怒りの自制)とともに、これまでの市民社会での基本的諸ルール(プライバシーの尊重、権力濫用の自粛、寛容の精神など)の確認から成っている。そのことは情報ネットワーク社会そのものの置かれている位置をよく示している。

(中村雄二郎『術語集Ⅱ』より)

